そよかぜ診療所での研修を終えて

神戸大学医学部付属病院　初期研修医
古川　湧也

11 月の 1 ヶ月間、そよかぜ診療所で研修させていただきました。1 ヶ月の研修が終わり、再び大学病院で日々の診療に携わっております。この場をお借りして、先月の研修を振り返りたいと思います。

そよかぜ診療所は神戸市から電車で 4 時間ほどの自然が豊かな土地にあります。診療所から車で 20 分ほど走ると東洋のマチュピチュとして有名な竹田城があります。竹田城の麓にある永楽というお寿司屋さんで頂いた日本酒「竹泉」はとても飲みやすく、美味しい料理との相性が抜群でついつい飲みすぎてしまったのは良い思い出です。

少し話が逸れてしまいましたが、診療所では主に内科を静子先生、外科を秀樹先生が診療しており、研修では超音波検査を始め、採血や胸部 X 線撮影など幅広く経験させていただきました。超音波検査では頚部、心臓、腹部を主に診させていただき、頚部と心臓に関しては自分で評価できるレベルまで上達することができました。特に、心エコーは内科当直で活躍する場面が多いため、今後の診療に活かすことができると思います。

午後からは診療所に隣接している院長先生宅で昼食をいただいた後、訪問診療へ向かいます。訪問診療では外来通院が困難な患者さんの自宅に赴き、問診、診察、採血などを行いました。訪問看護や訪問リハビリにも同行させていただき、点滴、内服管理、リハビリなども行いました。患者さんは自宅にいる時間が長くなるため、私達の訪問を待ち侘びているということを実感し、診療にさらに身が入りました。老々介護のご家庭や近くに頼れる家族がいない患者さんもおられた中、奥さんが献身的にご主人の介護をされているお宅が印象的でした。奥さんは睡眠時間も少なくなり、目に涙を浮かべながら「もう私の方もしんどい、休みたい。」と看病に疲弊した様子でした。静子先生は「いつも通り様子を見に行き、亡くなっていたとしても大往生じゃないですか。ずっと側にいる必要はないんですよ。」という言葉を掛けられており、奥さんは肩の荷が降りたような顔をされていました。患者さんの最期と、それを看取るご家族の生活に向き合う医師としての姿勢を、現場を通じて学ばせていただきました。患者さんとご家族の想いを汲み取り、安心して最期を迎えていただくことは、在宅診療の最も重要な役割であると感じました。

最後になりましたが、秀樹先生、静子先生、黒瀬先生を始め、スタッフの方々には大変お世話になりました。この 1 ヶ月で学んだことを、今後診療する患者さんに少しでも還元できるように日々精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

また、岡本家でごちそうになったご飯はとても美味しく、毎日食べ過ぎてしまいました。おばあちゃん、あやかさん、毎日ごちそうさまでした。また、カレー食べに行きます。